

● BATTLE GREEN 16 ●

私 自身の人生を振り返っても言えることだが、青年期の若者の社会観は主観的で自己中心的になりがちだ。生理的・心理的に発達中で社会的に成熟しきっていないから当然といえるのだが、典型的な青年は、自分の欲するものを得るためであれば他者にかける迷惑は考慮しない。それが、「理想的な社会をつくる」という高尚な目標であつてもだ。満足させたいのは他者ではなく自己である。

私が学生時代に学生運動家が苦手だったのは、他者の幸運を願うために援助したいという欲求よりも、自己の価値を証明するために体制を破壊するという利己的な欲求を感じたからである。

レキシントン町の高齢者が「町の中心街で高校生がたむろしていると、行きにくい」と感じるのとは、若者の利己的で破壊的なエネルギーが怖いからである。私もまた訪れる東京でそれをひしひしと感じるが、この町の高校生を怖いと感ずることはほとんどない。それは、数年前に取材目的で多くの高校生たちと会話を交わす機会に恵まれたからだらう。

彼らと語っているうちに、私は「マルチプル・インテリジェンス理論」のことを思い出した。ハーバード大学のハーワード・ガードナー教授が提唱したもので、人間の知能には一般的に受け入れられている言語的知能(Linguistic intelligence)と論理数学的知能(Logical-mathematical intelligence)のほかにも空間的(Spatial)、音楽的(Musical)、身体的(Bodily-Kinesthetic)、内面的(Intrapersonal)、対人的(Interpersonal)という七つの知能があるという説である。

学校教育では一般的に言語的知能と論理数学的知能に秀でている生徒の評価が高く、日本で有名大学に合格するのはこのカテゴリーに属する子供たちである。音楽的知能や身体的知能もすでに評価されてきた。

私が出会ったレキシントン高校生の多くはこれらの能力にも秀でていたが、それよりも印象的だったのは、他人の気持ちを察したり、人をまとめたり、指導することができる対人的知能や自分自身を理解できる内面的知能のほうである。

彼らには体制への不信感はあつても破壊の情熱はない。身近な大人への理解もある(驚くことに、私が出会った高校生の%が「親に感謝している」、「親が好き」と答えている)。町の高齢者を思いやり、社会情勢を憂い、自分でできることは何だらう、と自問する。また、町や学校といった体制をまっとうから否定せず、協力して状況を改善しようとする。そして、まだこれだけしか生きていない

バトルグリーン／連載エッセイ16

渡辺 由佳里

教育の恩恵



というのに、本から得た理念だけでなく自分の体験と比較することができると。

四年前、大学生活を一年経験したライアン・パッチは、ライフガードとしてアルバイト中のブルーで、エリート校として知られるレキシントン高校の「誰も語らないダークサイド」について率直に

語ってくれた。

レキシントン高校の競争の激しさは、全体的な学力レベルを上げているけれども、同時に多くの学生の自己評価の低さを招いてもいる。数学や科学のコンテストで優勝したり、大学で数学の授業を受けたりする生徒が山ほどいるレキシントン高校では、アメリカの平均的な高校でスターになれる優等生でも平凡な学生になつてしまう。当然彼らには敗北感や劣等感がつきまとう。

また、「成績さえ良ければ、何でも許す」という親たちの態度も彼は批判した。だから「親に隠れてセックス、ドラッグ、アルコールに溺れる二重生活を送る者がいる」というのだ。

ライアンは、ふつうの人よりも感受性が強いのだろう。だから教育の目的が「人間的な成長」を促すことではなく有名大学入学を目的としたものになつていてと感じてすっかり嫌気がさし、有名大学に入るための努力はまったくしなかった。

しかし、彼はワイートン大学に入学してから自分が受けた教育を振り返り、その恩恵に気づいた。そのひとつは、レキシントン高校の校風ともいえる社会貢献の意識である。

ライアンはブルに目をやつてこつつぶやいた。

「僕はレキシントン町という世界でもっとも恵まれた環境で育ち、プールサイドに座っているだけで一時間に、ドルももらえ、世界の多くの人々にしてみればとても不公平なことなんだ」

大学の授業で「貧困が個人に与える影響」について興味を抱いた

彼は、在学中にプロジェクトを企画して大学から資金を得、ニカラグアに渡った。そして、貧しい村でふたつの地域銀行を設立し、人の個人にローンを与えて彼らが新しいビジネスを始めるのを助けた。そして、彼は今年の夏アメリカ横断の旅で彼が力を注ぐマイクロクレジット(*註参照)の啓蒙と募金運動を行っている。

次に彼が気づいた恩恵は大学で苦勞せずにより成績を取ることができることである。無意識のうち高校で勉強の仕方を身につけていたようなのだ。今年大学を卒業した彼は、まだ行くかどうか決めていないがイギリスのケンブリッジ大学の大学院に合格している。「大金をチャリティに寄付して満足するような金持ちじゃなくて、自分の手で恵まれない子どもたちの生活を変えたい」という四年前の彼の夢は、ただの夢では終わらないだらう。

★プロフィール★
 わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病棟に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
 <著者のブログ>
 http://watanabeyukari.weblogs.jp/

*註 マイクロクレジット
 開発途上国で生まれた画期的な小額の融資システム。きわめて貧窮な者(多くは女性)に資金を与えて個人事業を始めさせ、自らの力で貧困から抜け出す機会を与えて成功を収めている。
 ライアン・パッチが今年協力して資金を集めているのは、ニカラグアのFoundation for International Community Assistance (FINCA)。ライアンのキャンペーンの情報は次のサイトまで。
 http://pedaforpeace2008.org/